





- (4) A: Hel\lo? (もしもし?)  
 B: /Yes. (はい?)
- (5) Don't worry. (大丈夫、気にしないで)

このような文脈で上昇調が用いられるのは、上昇調には、相手に対して発言を促したり、優しさ・親切・共感などを伝えたりする効果があるからである。Aが愛犬「あすか」を飼っていたとしよう。Aが「あすか」のことを溺愛していることを知っているBに対して、散歩の途中に行方が分からなくなった「あすか」のことを探しているAが(6A)のように尋ねた場合、Bは(6B)のように返答することが望ましい。

- (6) A: Have you seen Asuka? (「あすか」を見なかった?)  
 B: /No. (見ていないけど、どうしたの?)

(6B)のように上昇調を用いた返答をした場合、AはBの返答に続いて「実は、散歩の途中で…」など「あすか」を探している理由を説明することができるが、もし、(3B)のように下降調でNo.と答えてしまえば、それでAとBの会話は終了してしまうことになる。なぜなら、下降調のNo.は「知らない」という断定を表す音調だからである<sup>9)</sup>。

ここで注意しておかなければならないのは、英語母語話者は、英語学習者の母音や子音など、個々の音の発音に関しては寛容であるものの、イントネーションの誤りについてはそうではない場合が多いということである。これは、ネイティブスピーカーの側に、イントネーションについて、英語学習者は(母音や子音の発音と同様に)間違いを起こしてしまうという認識がないことによると考えられる。イントネーションは、英語のコミュニケーションにおいて大変重要な役割を果たしており、「(NoならNoという)文字通りの意味」以上のものを伝えている場合が多く、(6B)のNo.をどのようなイントネーションで発音するかによって、聞き手に異なるメッセージを伝えてしまうこともある。

上昇調と下降調の違いによって発話の意味が異なる別の事例を(7)で見てみよう。(7)を上昇調で発話すれば、単純に相手が満足しているかどうかを尋ねる疑問文となるが、下降調で発話されれば「それだけやれば満足でしょ」という意味となる。このようにyes-no疑問文は、下降調で発せられるとより真剣な響きを帯び、場合によっては威嚇しているように聞こえる。

- (7) Are you satisfied?

また、Hello というひじょうに簡単な挨拶表現(greeting)も、Hel\lo.と下降調で発音すればより格式ばって聞こえるし、Hel\lo.と上昇調で発音すれば「やあ」と個人に向けられているように聞こえる。同様に、間投表現(interjection)であるThank you. (ありがとう)は通常、下降調で発音されるが、上昇調/Thank you.では「あ、どうも」と型通りに感謝していることにしかならない。ここで見てきた一連の事例は、従来の学校英語教育では扱われてこなかったものである。

次に下降上昇調(fall-rise)を見てみよう。下降上昇調の基本的な意味は限定的な同意(limited agreement)や何らかの留保(reservation)にあり、不確実性・疑い、要求・要望、留保などの態度を伝える。表現されない含意は、通常はbut...で始まる節で表される。(8)を見てみよう。

- (8) a. Can you help me clean my office this weekend?  
 b. I have heard that Jack is a good student.

(8a)の発話に対して下降上昇調でYes.と返答した場合、本当は週末に別の用事があったりオフィスの掃除をするのに乗り気でなかったりすることを含意する。また、(8b)に対してYes.と返答した場合は、ジョン(John)について何か良くないことを知っていたり、(8b)の発話に対して完全には同意していなかったりすることを意味する。下降上昇調は、下降調、上昇調と並んで、

英語でひじょうに多く用いられる音調である。その例を(9)で見よう。一文が長い場合、その文をいくつかのイントネーション句に分けることがある。イントネーション句の境界は、通常、句や節などの文法上の境界と一致する。一般的に、1つの発話に2つ以上のイントネーション句がある場合、主たるイントネーション句には下降調が用いられて新情報を表し、従たるイントネーション句には非下降調（上昇調または下降上昇調）が用いられて旧情報を示す。

- (9) When I \first 'met you, | 'back in 199\5, | I 'thought you were 'quite \boring.  
(中郷 2012: 116)

なお、(9)の *back*, *thought*, *quite* に付けられた記号「|」は、その直後の音節にアクセントがあることを示す。また、*met* に付けられた記号「'」は主調子音節の後ろの尾部(tail)における内容語 *met* がリズム強勢を持つことを示すものである。

4 つ目に見る音調は、上昇下降調(rise-fall)である。上昇下降調は、非常に強い同意・不同意や驚き、強調を表す場合に用いられる。

- (10) A: This *sake* tastes great. (この日本酒おいしいね)  
B: ^Yes! (本当にそうだね!)
- (11) A: I studied for eight hours yesterday. (きのう 8 時間勉強したんだ)  
B: ^Eight! (8 時間も?)

5 つ目の音調である平坦調(level)は、英語では観察されはするものの、かなり限定的な文脈においてしか用いられない。例えば、教師が教室で出席簿の名前を読み上げて出席を取る場合、生徒は平坦調の *Yes* で返答する。また、保険の加入や入国審査における一連の質問（‘Are you a drug abuser or addict?’ ‘Have you ever been arrested?’ ‘Are you seeking to work in this country?’ ‘Have you ever been denied entry into this country?’ ‘Are you carrying currency over \$10,000?’）にはすべて、平坦調 *No* で返答することになる。平坦調は、無関心や退屈さを表す音調でもある。

これまでに、下降調、上昇調、下降上昇調、上昇下降調、平坦調の5つの音調を導入し、それぞれの音調が持つ基本的な意味を考察してきた。文のタイプごとのデフォルト音調を押さえておくと便利である。下降調は平叙文、感嘆文、wh 疑問文、命令文のデフォルト音調であり、上昇調は *yes-no* 疑問文のデフォルト音調である。それでも、やはり、(6)-(8)で見たように、ここで挙げられた意味が、それぞれの音調の持つ絶対的な意味ではないし、それぞれの文型や文脈において、ある特定の音調しか用いられるわけではないことには十分注意しなければならない。

### 3. イントネーションと情報

英語のイントネーションを考える際にもっとも重要なのは、ある英文において、どの語に主調子音節が現れるかということである。その際に、考慮に入れなければならないことが2つある。ここでは、その2つを順に見ていくことにしよう。

はじめに取り上げるのが、情報の新旧である。話し手と聞き手が共有していたり前提としていたりする既知の情報を旧情報(old information)と呼び、聞き手にとって新しい情報を新情報(new information)と呼ぶ。当然、旧情報は重要度が低い情報で、新情報は重要度が高い情報である。Tom hit Meg. (トムはメグを殴った) という文のイントネーションを考えてみよう。この文が、何の前提条件や文脈もなく、突然発せられたときのイントネーションは、(12)に示したようになる<sup>10)</sup>。

- (12) Tom hit Meg.                   ..... 3  
  ..... 2  
  ..... 1

しかし、同じ文が特定の文脈（談話）の中で発せられた場合は、その文の伝える意味とイントネーションが変わってくる。

(13) A: What did Tom do?

B: Tom hit Meg.

(14) A: Who hit Meg?

B: Tom hit Meg.

(13)において A と B の間で前提となっているのは「トムが何かをしたこと」である。したがって、(13B)における Tom は旧情報で、hit Meg の部分は A が知らなかった新情報である。逆に、(14)において A と B の間で前提となっているのは「メグが殴られたこと」であり、(14)の談話で A が B に尋ねたいのは誰がメグを殴ったということである。そのため、(14B)においては、Tom が新情報となる。(13B)と(14B)を見ると、いずれも、新情報に主調子音節が現れていることが分かる。

次に取り上げるのが、英語における焦点(focus)という概念についてである。焦点とは、文の中でトピックとなっているもののうちもっとも新しい情報のことである。英語では、通常、最も重要な情報が文末に置かれる傾向があり、ここことを文末焦点(end-focus)の原則と呼ぶ。高見(1995)は、談話における情報の順序を次のように示している。

#### (15) 情報配列の原則

英語では、重要度の低い情報をできるだけ文頭や文頭に近い位置に置き、重要度の高い情報をできるだけ文末や文末に近い位置に置く。

(高見 1995: 143-144)

会話においては、聞き手が知っている（と思われる）ことから話し始め、次に、知らないことを導入するという順序が自然である。文末原則の原則は、このことを反映したものであると考えることができる。

ここまでに見てきた新情報／旧情報の概念と、文末焦点の原則を押さえておけば、文のどこに主調子音節が来るかを容易に判断することができる。英文を読む際には、1) 文をいくつかの音調単位に分割し、2) その音調単位の中の末尾から遡って主調子音節が現れる語（通常は、もっとも音調単位の末尾にある内容語）を探し、3) その音調単位をすでに見た5つの音調のうちいずれの音調で発音すれば良いかを決定する、という手順を踏めばよい。研究者の中には、以上の3つの手順を、それぞれ、1) トーナリティ(tonality) 2) トーニシティ(tonicity) 3) トーン(tone)と呼び、3つの頭文字を取って「3つのT」とすることもある(Halliday 1967, Tench 1996, Wells 2006)<sup>11)</sup>。

さて、2002年度の大学入試センター試験に次のような出題があった（該当部分のみ抜粋）。

第1問 次の問い(A・B)に答えよ。

B 次の会話の下線部(1)~(4)について、それぞれ下の問い(問1~問4)に示された①~④の中で最も強調して発音されるものを一つずつ選べ。

《状況》 JimとRieが将来就きたい職業について話し合っている。

Jim: What job do you eventually want to have?

Rie: (1) I haven't thought about it. Have you?

(以下略)

問1

3

- ① haven't                      ② thought                      ③ about                      ④ it

この問題の正解は②のthoughtであるが、大手予備校のいわゆる自己採点の調査によると、約55万人の受験生の約86%が誤った解答をしている。

この問題が大学入試センター試験の問題として適切であったかどうかの議論は別にして、この問題の解答を導くことは、すぐ上で述べた主調子音節の判断基準に従えばそれほど難しいことではない。なぜなら、下線部を文末から遡って内容語を探していくと、最初に見つかる内容語がthoughtであり、これを「最も強調」すればよいからである<sup>12)</sup>。では、なぜ、圧倒的多くの受験生が正解に至ることができなかつたのだろうか。それは、母語である日本語の影響によると考えられる。日本語では、「結婚式に出られない」のように、否定語「ない」が文末に生起するため、文を最後まで聞かないとイエスかノーか分からないことが多い。したがって、日本語母語話者には否定語が特に重要だという意識が働き、そのような心理が英語の否定文にも転移をする。このことを、母語(L1: first language)からの転移と呼ぶ。受験生の多くが、②のthoughtではなく、誤って①のhaven'tを「最も強調して発音される」語として選択したのは、母語転移(L1 transfer)の例だと考えられる<sup>13)</sup>。

さらに、(16)の談話を見ておこう。

(16) A: What are your plans for the day?

B: I don't have any plans.

(16B)の返答における主調子音節はdon'tではなく、haveにある。では、なぜ、文末から遡って最初の内容語plansが主調子音節とはならないのであろうか。それは、plansは(16A)にも現れているために新情報ではなく旧情報と見なされるからである。このため、haveが主調子音節となる。このように、イントネーションと情報は不可分の関係にある。

必ずしも文(イントネーション句)のもっとも後ろにある内容語が主調子音節とならない例を2つ見ておくことにしよう。はじめに見るのが、(17)のような事例である。

(17) a. What did you eat this morning?

b. There's someone at the door.

(17a, b)では、文末の内容語morning, doorではなく、それぞれ、eatとsomeoneに主調子音節がくる。これは、時や場所を表す副詞相当語句は、情動的価値がそれほど高くないからである<sup>14)</sup>。

文のもっと後ろにある内容語が主調子音節とならないもう1つの場合は、(18), (19)のような出来事文(event sentence)に関するものである。

(18) A: Oh, you look pale. What's the matter with you?

B: Our dog died.

(19) A: Why were you late to class this morning?

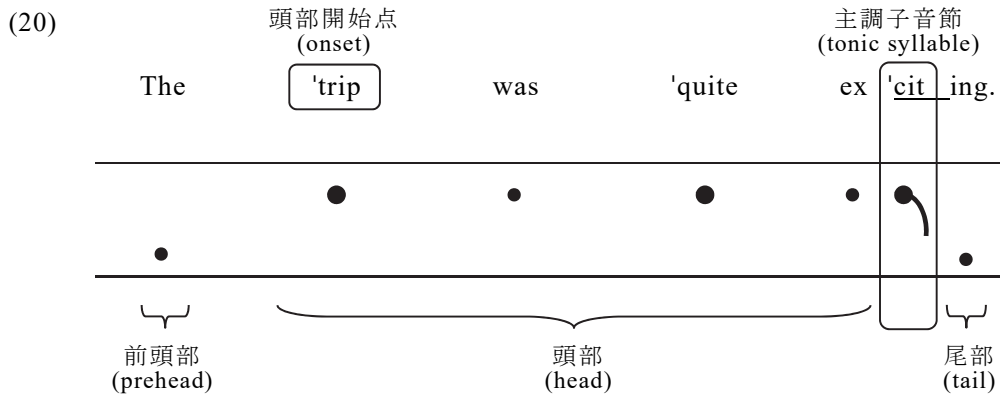
B: The \train was late.

文が伝える情報という観点からは、飼い犬が「死んだ」ということや、電車が「遅れた」ということが重要なのだが、動詞が自動詞で、「主語＋動詞」のいわゆる第一文型と呼ばれる出来事文の場合は、主調子音節は述部ではなく主語に来る。

この他にも、いくつかの「例外」はあるものの、文のもっとも後ろにある内容語に主調子音節がくるとというのが英語イントネーションの大原則である。

#### 4. イントネーション句の内部構造と高頭部・低頭部

あるイントネーション句の内部構造を示したのが(20)である。主調子音節の前に強勢を含む場合、その強勢の最初のもの(1つしかない場合はその強勢)を頭部開始点(onset)と呼ぶ。また、頭部開始点から主調子音節の直前の音節までの部分を頭部(head)と呼ぶ。頭部開始点の前にある音節すべてが前頭部(prehead)である。主調子音節の直後の音節からイントネーション句の最後までまでの部分が尾部(tail)と呼ぶ。



(中郷 2012: 111)

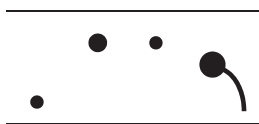
これまでは、主調子音節がどのような音調を取るかということについてのみ議論してきたが、実際は、頭部のどのような高さとなるのかによっても、発話全体のイントネーションは異なるものとなる。それが高頭部(high head)と低頭部(low head)である。

(21a)と(22a)のように、記号「'」を用いて'foodや'thatと表される高頭部のピッチは、主調子音節のはじめの高さよりも高くなる。それに対して、低頭部は(21b)の,foodや(22b)の,thatのように、記号「,」で表され、そのピッチは、通常、主調子音節のはじめの高さよりも低くなる<sup>15)</sup>。

(21) 下降調 (頭部に強勢のある音節が1つのみの場合)

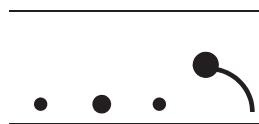
a. 高頭部

The 'food was \good.



b. 低頭部

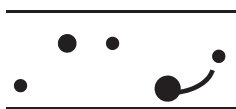
The ,food was \good.



(22) 上昇調（頭部に強勢のある音節が1つのみの場合）

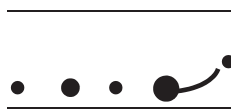
a. 高頭部

Is 'that the /reason?



b. 低頭部

Is ,that the /reason?

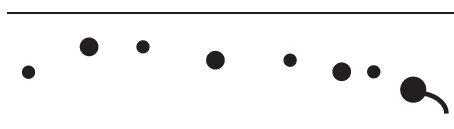


また、高頭部に強勢のある音節が2つ以上現れ、下降調である場合、(23a)のように、下降調の始まりの高さに向かって、徐々にピッチの高さが下降する。低頭部に強勢のある音節が2つ以上現れ、下降調である場合は、(23b)のように、下降調の始まりの高さに向かって、徐々にピッチの高さが上昇する。

(23) 下降調（頭部に強勢のある音節が2つ以上ある場合）

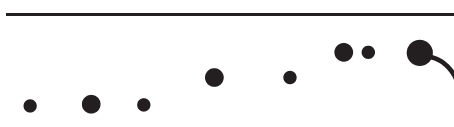
a. 高頭部

The 'food she 'bought was 'very \good.



b. 低頭部

The ,food she ,bought was ,very \good.

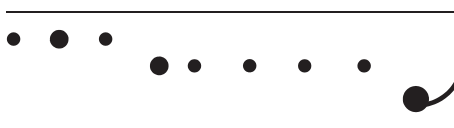


高頭部に強勢のある音節が2つ以上現れ、上昇調である場合、(24a)のように、下降調の始まりの高さに向かって、徐々にピッチの高さが下降するが、低頭部である場合は、(24b)のように下降調の始まりまでピッチは一定となる。

(24) 上昇調（頭部に強勢のある音節が2つ以上ある場合）

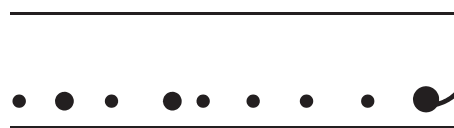
a. 高頭部

Is 'that the 'reason why you were /late?



b. 低頭部

Is ,that the ,reason why you were /late?



複数の音節からなる頭部については、より詳細な記述をする研究もあるが、ここでは、そこまでは立ち入らない。



日本人英語学習者は、高頭部を誤って主調子音節と認識してしまうことが多いので注意を要する。さらに、注意しなければならないのは、(25)のように、特に他人と対比をしている訳でもないのに、音調句が冒頭の無強勢音節で高く始まる事例である。このような現象は、高前頭部(**high prehead**)と呼ばれる。高前頭部は、低くはじめる場合に比べて、生き生きとしているように感じられたり、感情豊かで、強制的に聞こえたりするため、英語で散見される (Wells 2006: 215, Bolinger 1986: 32)。たとえ、(25)のような発話において、前頭部I'mが(記号「 $\bar{\quad}$ 」で表す)高いピッチとなっても、主調子音節は、それぞれ、coming, sorryにくる。

- (25) a.  $\bar{\quad}$ I'm coming.  
b.  $\bar{\quad}$ I'm sorry.

また、すでに見たように、主調子音節が上昇調となると、丁寧さを表したり、相手を安心させたりする態度を表す。

- (26)  $\bar{\quad}$ Don't /worry. (大丈夫だよ、心配しないで)

さて、日本人英語学習者の間で、驚くほど多く聞かれるのが、特に前提条件や文脈があるわけではないのに、(27)のように発音してしまうというケースである。

- (27) My name is Hanna. I live in Reading.

もちろん、「彼女がハンナなのではなく、ハンナはわたしですよ」「レディングに住んでいるのは彼女ではなく、わたしですよ」などといった対比を表す文脈では、MyやIに対比強勢(**contrastive stress**)が置かれ、(27)のようなイントネーションとなるが、通常の自己紹介の場面では、「名前がハンナであること」「レディングに住んでいること」が新情報になるので、当然、望ましいイントネーションは(28)に示すとおりである。

- (28) My name is Hanna. I live in Reading.

注目すべきことは、(22)-(24)で見たような高頭部および(25), (26)で見たような高前頭部と、(27)のような日本人英語学習者の発音は、明らかに状況が異なるということである。例えば、(25)のIは単に高い音調となっているだけで音調の変化や音調の動きが始まる部分ではないが、(27)のIは、音調の変化や音調の動きが始まる主調子音節となっているのである。では、なぜ、圧倒的に多くの日本人英語学習者はそのような発音を「習得」してしまうのだろうか。次稿では、そのことを明らかにしていきたい。

## 5. むすびにかえて

本稿では、英語イントネーションを理解するために必要な概念や英語イントネーションの特徴を概観するとともに、特に、日本人英語学習者がどのようなイントネーションの問題を抱えているかを指摘してきた。具体的には、英語のイントネーションでは、文のどこを主調子音節とするのか(トーンシティ)、その主調子音節をどの音調で発音するのか(トーン)が重要であり、主調子音節を決定するためには、イントネーション句の末尾に現れる内容語を中心に、新しい情報や焦点を考慮に入れたうえで決定しなければならないこと、また、音調を決定するためには、その文がどのような内容を伝えようとしているかを考慮して決定しなければならないことを見た。

日本の学校英語教育では、[r]と[l]、[θ]と[ð]、[æ]や[a]などの単音(分節音(segment))や、連結(linking)、強勢、リズムなどの超分節的(suprasegmental)な事象が取り上げられることはあっても、イントネーションそのものが本格的・積極的に扱われることはほとんどなく、大学生

はもちろんのこと、現役の英語教員の間でも、イントネーションについての正しい知識がほとんどないというのが現状である。

本稿ではまた、(27)で見たように日本人英語学習者が特に前提条件や文脈がないのに、文頭のIやmyを主調子音節としてしまうことが多いことを見た。このような発音は、英語の高(前)頭部とはまったく異なることに注意しなければならない。

ピッチの変化について、注意すべきことが2つある。1つは、自然下降または漸次下降(declination)と呼ばれる現象である。多くのイントネーション研究において、高いピッチで始まり、徐々にピッチの高さが下降するのが、英語のもっとも基本的で無標のイントネーションの形式であると言われている。しかし、この自然下降は、英語に限られるものではなく、音韻構造などの言語的要素と関係なく起こる日本語を含む世界のすべての言語で見られる生理的現象であり、話者自身にも意識されないことが多い。もう1つは、ダウンステップ(downstep)またはカタセシス(catathesis)と呼ばれる階段式下降である。自然下降とは異なり、ダウンステップは言語構造に依存し、日本語でも英語でも急激なピッチ下降となって現れる。次稿では、日本人英語学習者に見られる、文頭のIやmyを主調子音節とする読み方を、英語と日本語を対照させながら考察することにする。

## 注

- 1) 英語の強勢拍リズムを修得するために、教室ではメトロノームなどを用いた音読練習などを行うこともあるが、強勢拍リズムと言っても、強勢が時間的にまったく同一の間隔で生じる訳ではないことに注意しなければならない。なお、強勢拍リズムは、モールス信号リズム(Morse-code rhythm: James 1940)や交替のリズム(rhythm of alternation: Allen 1975)と呼ばれることもある。
- 2) 強勢(stress)に実際に必要なのは、「強さ」ではなく、「声の高さ」や「長さ」である。
- 3) このようにピッチを区別する場合、4の高さを設けることがある。しかし、4の高さは、強調や興奮の度合いが非常に強い場合などに限定されるため、ここでは無視することにする。
- 4) ここでの表記は、中郷(2012)に従っている。イントネーションのさまざまな表記法については渡辺(1994)のほか、Sweet (1890), Jones (1909), Coleman (1914), Palmer (1922, 1933), Ripman (1922), Armstrong and Ward (1931), Pike (1945), Kingdon (1958), Halliday (1967, 1970), O'Connor and Arnold (1973)などを参照のこと。
- 5) 主調子音節は核(nucleus)と呼ばれることもある。
- 6) イントネーション句は、イントネーション群(intonation group)、調子単位(tone unit)、調子群(tone group)、語群(word group)などさまざまな名称で呼ばれる。
- 7) 英語イントネーションの初学者には、この下降調という用語が、理解不能に思われる場合がある。なぜなら、(1)に示したイントネーションの曲線は、いったん、上昇しているように見えるからである。そのような学習者に対しては、音調が「下降」するためには、「高い」ところからの下降が必要となるため、(1)のような表記となるという説明をする必要がある。
- 8) 実際には、favorの第1音節が主調子音節となるため、fa-で音調が上昇するのだが、その音調の上昇は、第2音節の-vorに向かって続くため、このような音調曲線として表している。
- 9) 多くの言語では、ピッチの変化が意味の区別に役立っている。Pike (1948)や Lehiste (1970)では、ピッチの変化が言語のどのレベルで弁別的なものとして機能しているかという点に着目して、人間言語を声調言語(tone language)、音調言語(intonation language)、語ピッチ言語(word-pitch language)の3種類に分類した。

中国語をはじめ、タイ語、ベトナム語やアフリカの多くの言語は、声の高さが語彙的意味の区別に関わる声調言語である。声調言語では、トーンは通常、音節と結びつけられており、それぞれの音節に、高さが指定されている。例えば、中国語（北京官話）では、それぞれの音節が一声（高）、二声（上昇）、三声（下降上昇）、四声（下降）のいずれかの高さの特徴を持っており、(i)のように、/ma/をどのように発音するかによって、単語の意味も統語範疇（品詞）もまったく変わってしまう。これは、四声として知られている。/ma/の前に示した記号は、それぞれ、声の高さの異なる変化の様子を表す。

- (i) a.  $\bar{m}a$  媽（お母さん）  
 b.  $/ma$  麻（しびれる）  
 c.  $\vee ma$  馬（〔動物〕ウマ）  
 d.  $\backslash ma$  罵（ののしる）

英語でも、このようなトーンの変化が観察されが、中国語などの声調言語と英語が決定的に異なるのは、英語はどのようなトーンで発音されても、単語の語彙的意味そのものが変わってしまうわけではなく、文のレベルで高さが意味の区別にはじめて役立つということである。つまり、英語はトーンを語彙的には用いない。声調言語に対して、英語のような言語を音調言語と呼ぶ。英語では、Yes.や No.がどのような音調で発音されても yes や no の持つ「はい」「いいえ」という絶対的な意味に変化はないが、Yes.や No.という発話が伝える意味は変わってくる。これが、中国語のような声調言語と英語のような音調言語の違いである。

- 10) (11)における Meg のイントネーションを  $\text{Meg}$  と表記したのに対して、(1)で London と

なっていることの違いは、Meg は単音節語で 1 つの音節の中でピッチの変化が起こっているのに対して、2 音節語の London では、第 1 音節 Lon-がアクセントを付けて高く発音され、第 2 音節 -don が弱く・低く発音されていることによる。

- 11) Roach (2009: 144)は、3 つの T (tonality, tonicity, tone)について、次のように述べている。

In my experience people find it difficult to remember which is which, so I don't use these terms.

Roach が指摘するように、英語学習者にとってはこれらの用語は紛らわしく、イントネーションの習得に必要不可欠な用語ではないが、3 つの T の概念そのものについては、しっかりと理解しておく必要がある。

- 12) 学生や現役の英語教員を指導していてすぐに気づくのは、彼らが「強調」という用語を用いることが驚くほど多いということである。例えば、(1)の I met a man who came from London. という文において、「なぜ met, man, came, London を強く・長く読むのか」という質問をすると、ほとんどの場合、「強調したいからだ」という答えが返ってくる。しかし、実際には、この文において「会った!」「男!」「来た!」「ロンドン!」のすべてを本当に「強調」したい訳ではなく、「内容語であるから」という答えの方が適切である。このように、「強調」という用語や概念を用いては、ことの本質が見えなくなってしまうこともあるため、英語発音指導における「強調」という語の使用については、慎重になることが望ましい。
- 13) この議論については、長瀬（監訳）(2009: 21)の訳註およびそこに引用されている文献を参照のこと。
- 14) 同じ前置詞句でも、動詞にとって義務的で省略できない要素には主調子音節がくる。(i)の前置詞句 on the table は動詞 put の義務的要素であるため、主調子音節は table にくる。

(i) He put the book on the \table.

- 15) 「'」と「,」という記号は、Japa'nese や Christmas 'Eve のように単語レベルの第1強勢と第2強勢を指す場合と、ここで用いられているように、高頭部と低頭部において強勢が置かれている音節を指す場合の2つがあるので注意すること。

### 参考文献

- Allen, George D. (1975) "Speech Rhythm: Its Relation to Performance Universals and Articulatory Timing," *Journal of Phonetics* 3, pp. 75-86.
- Armstrong, Lilius E. and Ward, Ida C. (1931) *Handbook of English Intonation*, Second Edition, Cambridge: Heffer.
- Coleman, H. O. (1914) "Intonation and Emphasis," *Miscellanea Phonetica* 1, pp. 6-26. (岩崎民平 (訳) (1957) 『音調と音階』 (英語学ライブラリー2), 東京: 研究社.)
- Halliday, Michael A. K. (1967) *Intonation and Grammar in British English*, The Hague: Mouton.  
 —— (1970) *A Course in Spoken English: Intonation*, London: Oxford University Press.
- James, Arthur L. (1940) *Speech Signals in Telephony*, Bath: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd.
- Jones, Daniel (1909) *Intonation Curves*, Leipzig: Teubner.
- Kingdon, Roger (1958) *The Groundwork of English Intonation*, London: Longman.
- Lehiste, Ilse (1970) *Supersegmentals*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 中郷 慶(2012)「イントネーション」, 服部義弘 (編) 『音声学』 (朝倉日英対照言語学シリーズ2), 東京: 朝倉書店.
- O'Connor, Joseph D. and Arnold, Gordon F. (1973) *Intonation of Colloquial English*, Second Edition, London: Longman.
- Palmer, Harold, E. (1922) *English Intonation with Systematic Exercises*, Cambridge: W. Heffer & Sons Ltd.  
 —— (1933) *A New Classification of English Tones*, Tokyo: Kaitakusha.
- Pike, Kenneth L. (1945) *The Intonation of American English*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.  
 —— (1948) *Tone Languages*, Ann Arbor: The University of Chicago Press.
- Roach, Peter (2009) *English Phonetics and Phonology: A Practical Course*, Fourth Edition, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ripman, Walter (1922) *Good Speech: An Introduction to English Phonetics*, New York: E. P. Dutton & Co.
- Sweet, Henry (1890) *A Primer of Spoken English*, Oxford: Clarendon Press.
- 高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較』 (日英語対照研究シリーズ 4), 東京: くろしお出版.
- Tench, Paul (1996) *The Intonation Systems of English*, London: Cassell.
- 渡辺和幸(1994)『英語イントネーション論』, 東京: 研究社出版.
- Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.  
 (長瀬慶來 (監訳) (2009) 『英語のイントネーション』 研究社.)